

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32617  
研究種目：研究活動スタート支援  
研究期間：2015～2016  
課題番号：15H06596  
研究課題名（和文）島根県出雲地域諸方言の研究

研究課題名（英文）A study on Izumo dialects

## 研究代表者

平子 達也（Hirako, Tatsuya）

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：30758149

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、島根県出雲地域諸方言の共時的言語体系の全体像を明らかにするとともに、地理的変異についてもその概容を把握し、出雲諸方言の歴史的形成過程解明に向けた研究の進展に貢献することを目的とし、出雲地域諸方言の隣地調査を行った。研究期間中に所属研究機関の移動などがあり、必ずしも十分な調査を行うことはできなかったが、地理的変異の概要を把握するだけのデータを得ることができた。特に、アクセントと動詞形態論（活用体系）については全7地点で調査を行うことができた。また、大社方言と佐白方言については、簡易文法書を作成するのに必要な基本的なデータを収集することができた。

研究成果の概要（英文）：This study dealt with a grammatical description of the Izumo dialects, and the geographical variation of these dialects. A major outcome of the project consists of accent data of the seven Izumo dialects. At the outset, this study aimed at providing a comprehensive description of one of the dialects in the Izumo area, but I later decided to focus on a more detailed description of the geographical variation. This is related to the change in my affiliation and corresponding busyness. Despite the shift in the focus of the research, the research project was successful, as it enhanced the description of the geographical variation of these dialects, which was one of the central aims of this research.

研究分野：言語学

キーワード：出雲方言 アクセント 形態論 格

### 1. 研究開始当初の背景

島根県出雲地域諸方言は、日本語方言研究・日本語史研究・言語類型論など様々な点において重要な位置づけにある方言である。

出雲諸方言に関する研究としては、古く加藤(1935)に自らの省内にもとづく簡単な文法記述があり、後に広戸(1949; 1950)によるある程度のまとまった記述が出た。しかし、上述の加藤や広戸などの先行研究から半世紀以上が経過した現在、出雲諸方言の記述的研究はほとんど進展していない。近年の目立った成果と言えば、出雲諸方言の音声特徴に関する研究(前川 1984)や動詞活用形の一部についての論考(小西 2011)、若干の談話資料と語彙集などがあるだけで、体系的記述は皆無である。また、例えば上述のゼロ準体や属格助詞「ガ・ノ」の現れについては、多くの先行研究で指摘さえされていない。この他にも従来指摘されていない言語事実が存在している可能性がある。先行研究の記述も、体系性に欠けていたり、単なる事実の指摘だけで深い分析がなされていなかったりするなどの問題がある。

### 2. 研究の目的

上述の背景に鑑みれば、出雲諸方言の体系的な文法記述を行うことが差し当たりの重要な課題となる。また、出雲諸方言が持つ東日本的な特徴の歴史的位置づけを含めて、出雲諸方言の歴史的形成過程を明らかにするためには、出雲諸方言内部における地理的変異について網羅的に記述し、かつ、周辺方言との接触に起因する言語特徴の伝播までも考慮した歴史言語学的・方言地理学的研究が必要となる。

このような研究全体の構想の中で、出雲諸方言の共時的言語体系の全体像を明らかにするとともに、地理的変異についてもその概容を把握し、それにより出雲諸方言の歴史的形成過程解明に向けた研究の進展および関連諸分野の発展に資することが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

上記の目的の達成のため、具体的には出雲市大社方言の包括的な記述文書を提出することと、それを軸にして出雲地域諸方言の地理的変異についても可能な限りその詳細を把握することを目指し、出雲地域諸方言の隣地調査を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、島根県出雲地域諸方言の共時的言語体系の全体像を明らかにするとともに、地理的変異についてもその概容を把握し、出雲諸方言の歴史的形成過程解明に向けた研究の進展に貢献することを目的とし、出雲地域諸方言の隣地調査を行った。

研究期間中に所属研究機関の移動などがあり、必ずしも十分な調査を行うことはでき

なかったが、地理的変異の概要を把握するだけのデータを得ることができた。

特に、アクセントについては、全7地点で各地点1000語以上の単語のアクセントデータを収集することができた。そのアクセント型の分布パターンの分析から、以下のことが明らかになった。

すなわち、従来の研究(例えば広戸(1950))によれば、出雲方言もその内部は一樣でなく、音韻・語彙・形態等様々な要素によって、

- [I] 出雲市を中心とする北西部の方言、
- [II] 奥出雲町を中心とする南部の方言、
- [III] 安来市を中心とする北東部の方言、

に分けられるということが分かっているが、それが、アクセント型の分布からも支持されることが明らかになった。

また、出雲方言内部におけるアクセント型の分布の地域差が意味するところについて、歴史的観点から考察をした結果、アクセント型の分布からは、出雲方言は大きくA北西部方言群とB南部・北東部方言群の二系統に大きく分けられることが明らかになった。加えて、出雲方言内部に見られるアクセント型の連続的分布は、基本的にBの南部・北東部方言群の内部で起こったアクセント変化の過程を反映しているものとして捉えるべきであることが明らかになった。

また、大社方言と佐白方言については、簡易文法書を作成するのに必要な基本的なデータを収集することができた。特に、格助詞「ガ」と「ノ」について、その使い分けのあり方を記述した。特筆すべきは、出雲方言における格助詞「ガ」「ノ」の使い分けが、広戸(1950)が指摘するような、「ガ」「ノ」に前接する名詞が敬意の対象となるかどうか、という基準だけでなく、当該の名詞が、有情物か無情物かという基準にもよることが明らかになったことである。

即ち、「ガ」「ノ」が属格助詞として用いられる場合には、当該の名詞が敬意の対象となる場合には「ノ」しか用いることができず、敬意の対象とならない場合には「ガ」も「ノ」も用いることができる。ただし、敬意の対象とならない名詞であっても、無情物の場合には「ノ」しか用いることができないのである。

なお、「ガ」「ノ」が主格助詞として用いられる場合には、当該の名詞が敬意の対象となれば「ノ」も「ガ」も用いることができ、そうでなければ「ガ」しか用いることができない。この際には、有情物か無情物かの違いは関係がない。

以上、当初の目的は達成できなかったものの、アクセントを中心に、従来に無い研究成果を残すことができた。特に、アクセント型の分布から、出雲方言の地域差について歴史的観点から考察し、その分布のあり方と歴史的変遷を明らかにすることができた点は、大きな成果であった。

[引用文献]

- 広戸惇 (1949) 『山陰方言の語法』 島根新聞社.  
広戸惇 (1950) 『山陰方言の研究』 島根県立教育研修所.  
加藤義成 (1935) 「中央出雲方言語法考」 『方言』 5 (4)  
小西いずみ (2011) 「出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書」 『論叢国語教育学』 復刊 2.  
前川喜久雄 (1984) 「母音の合一と混同の理論 - 津軽, 出雲方言を例として」 『計量国語学』 14 (4)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

- (1) 平子達也 「出雲地域7方言の名詞アクセント資料 1~3 モーラ語」 『実践国文学』 (91) 320-278. (査読無) 2017年3月  
[https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1814&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=30](https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1814&item_no=1&page_id=13&block_id=30)  
(2) 平子達也 「愛知県新城市方言の名詞アクセント資料」 『駒澤大学文学部研究紀要』 (75) 1-28. (査読無) 2017年3月  
<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/36258/>  
(3) 平子達也 「静岡県浜松市東部方言の名詞アクセント資料」 『駒澤国文』 (54) 132-111. 2017年2月  
<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/36302/>  
(4) 平子達也・五十嵐陽介 「熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告」 『実践女子大学文学部紀要』 (実践女子大学文学部) 58号 pp. 1-22. (査読無) 2016年3月.  
[https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1420&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=30](https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1420&item_no=1&page_id=13&block_id=30)  
(5) 平子達也・五十嵐陽介 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」 『実践国文学』 (実践女子大学国文学会) 89号 pp. 107-69. (査読無) 2016年3月.  
[https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1457&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=30](https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1457&item_no=1&page_id=13&block_id=30)  
(6) 平子達也 「出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について」 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究』 出雲方言調査報告書 (国立国語研究所) pp. 69-79. (査読無) 2016年3月.  
<http://pj.ninjal.ac.jp/endangered/Research%20Report%20on%20Izumo.pdf>

rch%20Report%20on%20Izumo.pdf

[学会発表](計 5件)

- (1) 五十嵐陽介・平子達也 「「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言 佐賀県杵島方言と琉球語の比較」 『日本音声学会第30回全国大会予稿集』 pp. 138-145. 2016年9月18日, 早稲田大学(東京都・新宿区).  
(2) 平子達也 「東西両アクセントの違いができるまで」再考 能登島諸方言のアクセントから」 実践女子大学大学院国文学専攻前期研究発表会. 2016年7月23日, 実践女子大学(東京都・渋谷区).(招待有)  
(3) 平子達也 「外輪式アクセントに関する幾つかの問題」 Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology. 2016年7月2日, 東京外国語大学(東京都・府中市).(招待有)  
(4) 平子達也 「日本語諸方言アクセントの史的研究と「比較方法」 服部四郎と金田一春彦の論争から」 国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影」 第2回共同研究会. 2016年6月19日, 国際日本文化研究センター(京都府・京都市).(招待有)  
(5) 平子達也 「日本祖語について」について」日本語学会 2016年度春季大会. 2016年5月15日, 学習院大学(東京都・豊島区).

[図書](計 1件)

田窪行則・Whitman, John・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語の再建にむけて』 東京: くろしお出版. (査読無) 2016年4月. 309 pp.

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

平子 達也 (Hirako, Tatsuya)

駒澤大学・文学部・講師

研究者番号：30758149

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

友定 賢治 (Tomosada, Kenji)